

対ソ連戦争直前のアフガニスタンにおけるイスラーム運動

研究シンポジウム 「30年の後 ソ連のアフガニスタン侵攻」

秋葉原UDX

大阪大学世界言語研究センター 准教授 山根 聡

1. はじめに

アフガニスタンの人々の誇り

外国人支配を排斥した誇り 対英アフガン戦争(1838年、1878年、1919年)

インド人は英領インドを「戦争の家」としアフガニスタンを「イスラームの家」と評価

カーブルでのインド独立政府樹立(1915年)

アーザードによるイスラームの家アフガニスタンへの移住推奨(1922年)

アフガニスタンという地理

オスマントルコ、イラン、インドとの接点 イスラーム運動の諸潮流との接触

冷戦の最前線

諸外国の干渉(米ソ)

パシュトゥニスタン問題

パキスタンの懸案事項←インドの関与

パシュトゥーン人を統括し、親パキスタン政府を樹立できる人材に期待

アフガニスタンでの諸運動の多様性

ジハードの主張の変遷

1970-80年代 反共産主義ジハード(対ソ連、反政府) 冷戦の時代

1990年代 内戦に反発するターリバーン 内戦の時代

2000年代 反米ジハード 対テロ戦争の時代

革命(伝統的社会(地主と小作人の「持ちつ持たれつ」の関係)破壊)に反対する意志

イスラームとの関係は希薄 「故郷を守る」意識

「与えられた土地を利用できるほど技術も意識も芽生えていない農民たち自身が、地主側に味方した」[金:17]

1980年、ペシャワールで開催された「ローヤ・ジルガ」(961人参加)では、急進的なイスラーム体制確立に反対、部族単位での連邦制と非同盟主義を採択

イデオロギーとしてのイスラーム主義と一線を画す

スーフィーを指導者とする地域密着型の社会の維持

世俗的民主主義を志向、国王復帰を支持

ムッラーの主張「土地はその地域のものであって、国有化されるものではない」[Olesen, 239]

→反政府運動の多様化

個人的な記憶

高校時代の世界史の授業

大学時代 パキスタンでのタバコ 難民支援事業 アフガニスタンへのムジャーヒディーンへの支援

2. ソ連軍侵攻前夜 ムスリム知識層の運動

- 1953年 スイブガトゥッラー・ムジャッディディー(後のムジャーヒディーン政権初代大統領)、アズハル大学で修士号取得
- 1957-8年頃 グラーム・ムハンマド・ニヤーズイー・カーブル大学教授が「イスラーム運動(イスラーム協会)」を主催。ニヤーズイー教授はアズハル大学修士修了で、ムスリム同胞団の強い影響を受ける。
アフガニスタン政府、パキスタンとの国境線(デュアランド・ライン)に対し非難
- 1960年 パキスタン政府、ソ連によるパシュトゥニスタン問題干渉を批判
アフガニスタン政府、米軍機やパキスタン軍機の領空侵犯を批判
ユーヌス・ハーリス (後のイスラーム党ハーリス派党首)、クトゥブ著『イスラームと社会正義』を翻訳出版。ラッバーニー(後のイスラーム協会代表)もクトゥブの著作を翻訳紹介する。この時期、マウドゥーディーの著作も翻訳される。
- 1961年 ザーヒル国王、パシュトゥーン人の民族自決支持を表明
アフガニスタンとパキスタンの国交断絶(63年修復)
- 1962年 イスラーム世界連盟(ラービタ)成立
- 1964年 イランの白色革命(包括的近代化)に反対したホメイニー、国外追放される
- 1965年 アフガニスタン人民民主党(PDPA)発足 タラキー書記長、バブラク・カールマル副書記長
ヘクマティヤールらも一時参加
党内での革命路線の方針により対立
ハルク派(タラキー系、パシュトゥーン民族主義、パシュト語機関紙発行、暴力革命を志向)
パルチャム派(カールマル系、親ソ、ダリー語機関紙発行、段階的革命を志向)
学生のデモが政府批判に発展
- 1966年 ブルハースッディーン・ラッバーニー、カーブル大学卒業後、アズハル大学へ留学
クトゥブが処刑される
同時期、アブル・ラスール・サヤーフもアズハルで修士号取得
- 1967-8年 ラッバーニー、アズハルで修士号取得後帰国、カーブル大学内でのイスラーム運動のとりまとめ役に就任、
72年には正式にイスラーム協会の代表に就任(現在に至る)
この時期、『我々は誰で、何を望むのか?』という題名のイスラーム主義の雑誌が刊行される
- 1969年 ラッバーニーとヘクマティヤール、アフガニスタンでムスリム同胞団(Ikhwānūl Muslimīn)結成
イスラーム協会の傘下の実働部隊としてムスリム青年団(Jawānān-i Musalmān)結成、大学などでの政治活動を牽引、1970年にヘクマティヤールが代表に就任
- 1973年 ダーウード政権樹立、
- 1974年 ニヤーズイー教授処刑される、300人近いムスリム運動家が逮捕される
この時期にヘクマティヤールはパキスタンへ逃亡、イスラーム党(Hizb-i Islāmī)設立
- 1975年 ラッバーニー、アフガニスタン政府の逮捕を逃れてパキスタンへ移動、逮捕者は270人
- 1976年 ヘクマティヤール、マスウードの親友殺害の嫌疑がかかり、両者は対立
- 1977年 イスラーム党の内部分裂でヘクマティヤールはイスラーム党ヘクマティヤール派(Hizb-i Islāmī Gulbuddīn)を結成、残りのユーヌス・ハーリスによって1979年にハーリス派を結成
- 1978年 サウル革命により、社会主義政権樹立、タラキー革命評議会議長、バブラク・カールマルとハフィーズッラー・アミン副議長体制でアフガニスタン民主共和国
急進的な社会主義改革(暴力を伴う識字教育の徹底化、急激な土地改革)
→識字率向上をジハードと掲げるも、宗教教育が公教育に含まれなかったとして批判が出る
PDPA、反政府活動家を一斉検挙、サヤーフ投獄される(アミンによる釈放後、パキスタンのペシャワ

ルへ移動)

- 1979年 2月 イラン革命 ヘクマティヤールはイスラーム革命に影響を受け、ホメイニーへの敬意を示す
9月 タラキー急死
12月 アミーン死亡 ソ連軍侵攻
アフマド・シャー・マスウード、カーブル大学に入学
サイイド・アリー・ビヒシュティール、シーア派組織アフガニスタン・イスラーム統一革命評議会を結成
- 1980年 1月 アフガニスタン解放イスラーム同盟(IALA)結成
3月 ヘクマティヤール、議長選挙について同盟内グループの構成比に応じるべきと主張して脱退



前列左からヘクマティヤール、ラッバーニー、ムジャッディディール

3. 大義としてのイスラーム主義

イスラーム主義

イスラームの理念を掲げ、最終的にはイスラーム法によって秩序づけられた国家建設を志向する運動

アフガニスタンにおけるイスラーム主義

エジプトの影響 留学経験者 (ニヤーズイー、ラッバーニー、サヤーフ)

大学生らを中心とした知識層を中心に展開

1960年代のイスラーム協会での議論 無神論者、物質主義に対するイスラームからの批判

→親共産主義政権に対する批判へ

急速な改革を志向 産業化、教育改革など 近代主義的傾向[Olesen]

サウジアラビアの財政支援

イラン革命の影響

西側諸国の黙認(支援)

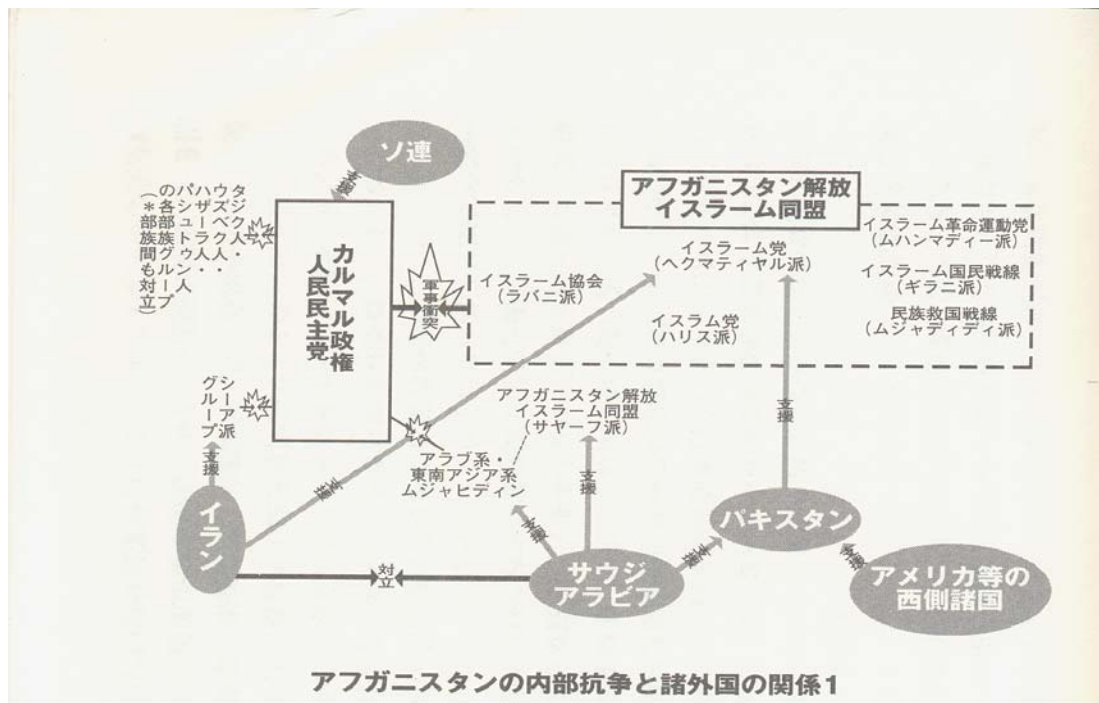
ラッバーニー アフガニスタンという国家内でのイスラーム体制の樹立を図る 「穏健派」

ヘクマティヤール イランやパキスタンの支援を得て、国境を越えたイスラーム革命を志向 「急進派」

「主義」だけで活動していたのか？

主義に関する具体的議論のなさ→まずは戦争に勝たねばならない→大義の必要性和十分性

個人的対立 ヘクマティヤールとマスウード



参考文献

Amin, Tahir *Afghanistan Crisis: Implications and Options for Muslim World, Iran and Pakistan*, Islamabad: Institute of Policy Studies, 1982.

金成浩 『アフガン戦争の真実 米ソ冷戦加の小国の悲劇』 NHK ブックス, 2002.

前田耕作, 山根聡 『アフガニスタン史』 河出書房新社, 2002

Olesen, Asta, *Islam and Politics in Afghanistan*, Surrey: Curzon Press, 1995.

鈴木均編著 『ハンドブック 現代アフガニスタン』 明石書店, 2005.